

A Zen Forestへの序文

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: スナイダー, ゲーリー, 重松, 宗育, 望月, 瑞子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008659

A Zen Forest への序文

ゲーリー・スナイダー

(重松宗育・望月瑞子共訳)

コロラド川下流に住むモハーベ・インディアンは、美的宗教的行事につきやす労力を、すべて長い物語詩の暗唱に注いだ。こうした叙事詩の中には、カリフォルニア南西部の広大な盆地や砂漠や山のことを詳しく物語ったものがいくつもある。その叙述の正確さは正に驚くべきほどだが、暗唱の名人たちは、すべて、夢の中で覚えたものと考えていた。同じように、逆説的な例がある。禅仏教は、「不立文字」—— それに、飾り気のない堂内、簡素な仏壇、黒い僧衣——を旨としているにもかかわらず、極めてユニークな文学の一大文化を築き上げた。そしてそこには、禅の修行でおこなわれる、言葉による表現と言葉によらない表現との、両者の関係のむずかしさが歴然としている。高度の学問を修めた禅者たちは、同時に世俗文学にもよく通じていて、題材の如何にかかわらず、役に立つ表現を見つけ出しては自分の道具箱の中に加え、必要に応じて取り出して使ったが、原文とはいささか異なる禅語として用いられることも、少なくはなかった。こうした語句収集の最終段階は、禅籍、中国の詩、仏典、道教・儒教の古典、伝承的なことわざをもう一度洗い直すことであった。それは、16、17世紀の日本でなされ、その結果が『禅林句集』となったのだ。ここに集められた句の大部分は、中国の詩から採ったものである。それ故にR・H・ブライスは、「『禅林句集』は、詩を通して俳句へ向かう途中の禅的世界観である」と言ったのだ。

さて、この書に目を向けよう。これは、従来あったような「偉大な文学」からの引用や抜粋を集めたものとは、大分異なる。この基礎的な編集をした東陽英朝禅師およびその後継者たちは、自らの求めるものが何であるか、はっきり知っていた。重松宗育氏のイントロダクションには、このところが説明されている。

しかし、母体である原典が豊かでなかったら、『禅林句集』は、今のような簡潔な力強さと生き生きした感じを持たなかつただろう。まず、簡潔さについ

て。これはすべて中国語からくる。(本書には、付録として、漢字に日本語読みが添えられているが、これは、中国語を日本語化したもので、中国語の発音や語順を表わしてはいない。日本の禅の修行者は、このように読んでいる。)中国語は、ほとんどが単音節で、語順による文章構造を持つので、極めて言葉が少なくてすむ。中国には、長い年月を通じ、文化全体にわたって築き上げられた、引用や格言の言葉遊びの伝統がある。それは、数多い同音異義語のもつ曖昧さとまぎらわしさを遊びの材料とする、人々の知恵である。古い時代の『易経』や道家の随筆などには、「謎めいた言葉」が多い。禅の句集では、曖昧な格言、早口ことば、伝承的な謎かけ、といったものは、慎重に除かれている。自派の禅籍からの引用の他に収録されているのは、一般的な引用や格言からの抜粋である。詩は全体がそのまま引用されることはないので、(特に西洋の読者が)不明瞭さを感じるのは、詩の前後関係がわからないためである。句が、古い格言そのものである場合、例えば、

懸羊頭賣狗肉

To sell dog meat
displaying a sheep's head.

のような場合には、いくつかのレベルの意味がすぐに理解できる。中国語の語順の通りに英語の単語を並べれば、“Hang sheep head sell dog meat”ということになる。『句集』には、この他に次の句もある。

五十歩笑也先百歩

One who flees
fifty steps
Sneers at the other
who's done a hundred.

英語も、比較的語数が少なくてすむ言語であるが、これを中国語にすると、ただ“Fifty steps sneer him ahead one hundred”だけですむ。これは、戦いから逃亡する場面の話だ。

『句集』で、一番多いのは、五言詩から対になった二行を取り出したものである。これらは「五言対」と呼ばれ、貝葉書院版の『禅林句集』には、578句が収録されている。（重松氏は、漢字の語数別に句を配列するという、伝統的なやり方はとっていない。彼自身の独創による句の並べ方のおかげで、多分この本は、読み進むのが楽になったと思われる。）次に数の多いのは七言の句で、これには、七言と七言対とがあり、やはり詩から採られたものだ。

中国の詩は、言語が本来もっている簡潔さという特長を引き出し、それを更に際立たせている。中国の詩は、詩を除いたら無味乾燥な四角ばったものだけになってしまう中国の文学に、個人的な感情——弱さ、愛情、孤独——を吹き込むことのできた、唯一のジャンルなのである。4、5世紀の頃、中国の知識人たちの心を最も引きつけた仏教の教えは、無常観であった。このことは、その当時の、つまり混乱の六朝時代の政治的変遷をよく反映している。この時代の叙情詩もまた、悲しみと愁いに満ちたものだ。だから、中国の詩は、初めから仏教に通ずるものを持っていたと言える。中国人（に限らず大抵の人々）は、8世紀の唐代の詩が、中国文学の最高峰だと考えている。この時期の詩は、六朝時代の涙もろい叙情詩に比べて、断然すぐれており、禅の句の収集にとって格好の草刈場となったのだ。陶淵明は特別の例外として、今問題にしているのは、とりわけ、王維、李白、杜甫、寒山、柳宗元などの唐詩人たちである。この中には仏教徒もいるが、このことは禅の句にとって何ら関係ない。観念が問題なのではなく、イメージや比喩の力、詩の持つ魔力こそ肝心だからである。これらの詩人たちと同時代に出たのが、神会、南嶽、馬祖、百丈、石頭といった創造的で偉大な禅匠たちであった。理由はどうあれ、中国詩の黄金時代は、そのまま禅の黄金時代でもあった。12世紀の禅匠たちは、唐代の先達の逸話や伝記から公案を集めて書物にまとめたが、同時に、その時代の詩人たちの作品にも目を通し、収集の対象にしていたのだ。

このようにして収集された詩の中には、ほとんどの中国人や教育ある日本人が、もう何世紀にもわたって広く親しんできたものが少なくない。そのうちに

は、ことわざの領域に入っているものもある。次の杜甫の詩がその例だ。

國破山河在 城春草木深

The country is ruined : yet
mountains and rivers remain.
It's spring in the walled town,
the grass growing wild.

この詩は、安祿山の乱による都の滅亡を背景としている。杜甫は仏教徒ではなかったが、彼の生き方や作品は、仏教の本質に近かった。バートン・ワトソンは、杜甫についてこう言っている。

杜甫は、どのような題材も正しく扱われるならば、詩的でないものはないことを例証してみせ、詩の定義の範囲を拡大するような作品を書いた……。杜甫が草木や薬用植物に関する伝承に精通していたことをうかがわせる証拠がある。そして多分この知識のおかげで、杜甫は、自然界の小さな生物に対しても特別の眼を持つことができたのだろう。その詩の中には、鳥、魚、昆虫に対する愛情を表現したものがあり、それは、仏教の影響を受けたものと言ってよいだろう。理由はともあれ、杜甫は、自然界の小さな営みや生き物に対して、鋭い感受性を持っていたようだ……。断え間なく、また一見、意味もなく続くこの自然界のあらゆる営みのどこかに真実があるはずだ、と杜甫は言い続けているのだ。

中国人の生命や自然に対する態度、すなわちその深い感受性を波にたとえれば、こうした詩人たちや禅匠たちは、ある意味では、7世紀から14世紀にかけて盛り上がり次第に引いていった波の、ほんの先端にすぎなかったと言ってよい。禅の重要な文学作品である『無門関』、『従容録』、『碧巖録』、『虚堂録』などは、すべて12、13世紀のものである。この時期は、いわば禅の第二の黄金時代で、またすばらしい詩の生まれたもう一つの時代でもあり、多くの詩人た

ちが、本当の意味で禅から影響を受けた時代であった。最も評価の高い宋代の詩人、蘇軾、詩人であり行政官であったが、同時に禅の達人としても世に知られていた。

溪聲便是廣長舌 山色豈非清淨身

Valley sounds :
the eloquent
tongue —

Mountain form :
isn't it
Pure Body ?

これは、蘇軾の詩の一部だ。日本の禅匠、道元は、この詩に強く心を引かれ、『正法眼蔵』の「溪聲山色」に下敷きとして使った。宋代の禅は、先人の語録や言い伝えから拾い出した逸話や題材をテーマにして瞑想する、修行形態をとっていた。この点を伝統的に強調してきた臨済宗は、「看話する」禅と呼ばれる。これと対の一派は、曹洞宗と呼ばれ、古い語を用いず、「黙照禅」とも呼ばれる。両派とも、蒙古侵入直前の中国から、日本へと伝えられた。日本は、本来のみがきぬかれた自然感覚の上に、更に唐宋の世界観をも受け継ぎ、吸収していったのだ。

ロバート・エイトケン老師は、公案(そして暗に『禅林句集』)を、「禅の民間伝承」という言葉で表現している。公案は、中国の民族全体の伝承から一部借りたものだが、禅の民間伝承としての公案は、使い方の点で極めて限られている。この『句集』の詩句は、一種の仲間うちの名句として、また深い意味を手短かに表わす俗語として、ただ修行者たちの間でやりとりされるだけのものではない。そうではなくて、公案への「個人的な」見解の次元を超えてさらに深い境地に到る方法、すなわち、「大いなる心」に確かに触れ得たことを証明する方法として、参禅の折りに、ごく簡潔に使われるものなのだ。禅語の価値は、ただ文学的比喩がすぐれていることにあるのではなく、この現実の世界に

において、その比喩を、行動の中に具現しようと挑戦することにある。つまり、禅語は、修行者が象徴や抽象概念をこの現実世界に引き戻し、具体的に実践する、その手助けをするのだ。禅は、この困難な仕事を見事に可能にしてくれる——とは言うものの、それは、詩やことわざ本来の機能と大差はない。ことわざがことわざたり得るのは、それがまさに真実だからだ、と言った人がある。

だから、もし禅が民間伝承の代わりに公案を持つなら、世界は、公案の代わりに民間伝承を持つのだ。世界中のことわざと短い詩には、同じような迫力があり、同じ位の奥深さが感じられる。重松氏は、三語以下の短い句を本書では取り上げないことにしたが、このことは、禅の句がいかなる働きをするか、また何故か、を説明している。一言の句の持つ力はどんなものだろうか。私は、ユーロック・インディアンのしつけについて説明してくれたハリー・ロバーツの話の思い出す。若者が何か馬鹿なことをしでかした時、長老が言うべきことは、ただ

さあて！

この一言で、若者はその場を去り、何時間も熟考することになるのだ。

さて、紀元前7世紀のギリシャ詩人（傭兵だった）アルキロコスに着目していただきたい。

——大混乱ともなれば

臆病者まで勇敢になる

——カラスの気違いじみた喜びざまに

近くの岩のカワセミが

羽をばたつかせて、飛び去った

——ストローの穴を通して

水差しの中へ

（ガイ・ディヴンポート訳）

バンツ一族の謎かけ。

暗い畑に
白いとうもろこし、
空と星

次に、フィリピンもの。

家の主がつかまって
家は窓から逃げてった
—— 魚とりの網

次に、アラスカのユーコンのコユコン族のもの。

—— 舞い上がって
音をたてずに鐘を打ち鳴らすもの、
ちょうちょ

—— 遠くでパッと
燃え上がる炎、
赤ギツネの尻尾

—— 赤いカヌーに乗って
みんな川をさか上る、
われらサケ

(R・ダウエンハウア)

次に、サモア人のもの。

—— 老いた雌鶏が地面を引っ掻けば
ひな鶏たちはカブト虫をついばむ

次に、ハワイ人のもの。

— ダンス学校に行ったからといって、どんな
知識でも得られる訳ではない

そして最後に、ケンタッキーの人々のもの。

「足が冷えるなあ」と、一人が言う。
すると、足のない男が答える。
「僕のもさ。
僕の足もさ。」

しかし本書は、禅と世界の民間伝承のもつ魅力的な内容をも超えて、一種の「詩片からなる詩」として、それ自体独り立ちしているのだ。我々は、今世紀のモダニストの詩から学び身につけてきたもののおかげで、重松氏の見事な翻訳を読んで、その独創的な詩の構成のあとをたどってゆくことができる。ヒュー・ケナーは、アルキロコスを紹介した文の中で、「言語のもつ簡潔な働きと間投詞的な働きの中に、我々が再発見する喜び」について述べている。とすれば、この句集は、あちこち飛び回る好奇心を満たすために読めばいいのであり、今は、しばらく自己修養などという考えをすべて捨てることにしよう。この本は、東洋のすぐれた人々の手によって、三千年にわたる中国文化の歴史の中から選出された、新しい英語の詩だ。それはまた、最も高尚なものと、最も下々のもの、すなわち、大詩人と、「老婆の言い伝え」とも言うべきことわざとが、出会う場所でもある。アーサー・スミスによれば、「19世紀中国の清朝の官吏たちは、まるで四書から引用するかのようになりげなく老婆の言い伝えを使って、会議や会話に味をつけたことで有名」ということだ。

本書がこうして世に出たのは、過去の禅匠たちと、20世紀の詩人たち、そして老婆たちとが、手を取り合ったからに違いない。

〔付記〕

ゲーリー・スナイダー (Gary Snyder, 1930 —) は、現代アメリカの代表的詩人の一人である。 *Earth House Hold* (エッセイ) や、 *The Back Country, Regarding Waves* などの詩集があり、1974年には、代表作 *Turtle Island* によってピューリッツァ賞を受けた。50年代から60年代にかけてのビート派文学運動における中心人物の一人でもあった。

スナイダーは、現在カリフォルニアの山中に住んでおり、長年、自然環境問題には深い関心を払ってきている。彼のライフ・スタイルから大きな影響を受けた人々は数多く、特にアメリカ西海岸での若者を中心としたその人気は、根強く、いわば教祖的存在である。

また、スナイダーには、宮沢賢治の詩や「寒山詩」のすぐれた英訳がある。そして1956年から64年にかけて、京都の相国寺や大徳寺において禅の修行をしており、アメリカの社会や文学に、禅の行を紹介し影響を与えた点での功績は極めて大きい。

昨年世に出た拙著 *A Zen Forest : Sayings of the Masters* (Weather-hill, 1981) のために寄せてくれたスナイダーの序文は、いわゆる“序文”と違い、極めて質の高い論文であった。それ故、是非紹介すべきものと考え、望月 (静岡女子短大助手・人文第10回卒業) と私とがここに共訳した次第である。分かりにくい箇所もあったが、それについては、昨夏スナイダーが小庵 (清水市・臨濟宗承元寺) に滞在した折りに、直接本人に聞いて参考にした。(重松)